

第2日目(8月21日) 午後 E-101 12:05~12:50

ランチョンセミナー1	思考力・判断力・表現力を育むライティング指導	講師: 大井恭子(清泉女子大学)
------------	------------------------	------------------

第2日目(8月21日) 午後 E-205 12:05~12:50

ランチョンセミナー2	IRTに基づくテスト開発・運用	講師: 斉田智里(横浜国立大学)
------------	-----------------	------------------

第2日目(8月21日) 午後 E-201 12:05~12:50

ランチョンセミナー3	ビデオによる授業研究会 ーフォーカス・オン・フォームを取り入れたスピーキングの授業ー	講師: 三枝幸一(山梨県都留市立都留第一中学校) 杉田由仁(明治学院大学)
------------	---	--

第2日目(8月21日) 午後 第1室(E-201) (10) 13:00 (11) 13:30

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
(10)	研究	大	指導法	加藤 和美(東海大学)	学習者のニーズに応え続ける授業	近年、タスク活動やアクティブラーニング導入など、グループ活動を取り入れた授業が増えており、その内容に注目が集まっている。しかし、タスクを達成させるためには、どのようにグループ活動を進行させたらよいのか、どんな英語表現を使ったらよいのかなど、学習者にとってはタスクの内容以前の問題が発生している。そこで、学習者にはタスク活動を英語で行うための積み上げ期間が必要だと考えた。本研究者はこれまでに、「どのようにしたら英語でグループ活動ができるか」を授業目標に設定し、学習者のニーズに応えながら授業を展開してきた。授業の特徴は、グループ活動に必要な英語表現を単に丸暗記させるのではなく、実際にディスカッションしてみてもどのような表現が必要だったのかを考えさせている点、さらに、同じ活動を英語母語話者が行い、その様子を比較分析させている点にある。オリジナル教材とiPadを使った授業実践とその効果を紹介する。
(11)	研究	小	早期英語教育	長谷川 修治(植草学園大学)	デジタル英語教材を使用した授業の記憶効果ー小学校6年生を対象にー	本研究の目的は、独自に開発したデジタル英語教材を使用した授業で、学習した英語のフレーズが、どの程度記憶に残るかを検証することであった。そのため、公立小学校の6年生18名を対象に、一斉指導で5回の授業を実施し、その都度扱った5個の英語フレーズを記憶テストで確認した。また、5回の授業の事前・事後にも、全授業で扱った合計25個の英語フレーズの記憶テストを実施した。記憶テストは、各英語フレーズを教員が口頭で2回発話した直後に、その意味を児童が紙に書く方式とした。その結果、5回の授業の事前・事後に行った記憶テストでは、成績が向上し有意な差となった。また、各授業で行った記憶テストでも、事前テストに対して授業の10分後、2日後、5日後、7日後、14日後の結果は、有意な差となった。しかし、10分後以降の成績に有意な差はなかった。よって、開発したデジタル英語教材は、学習事項が持続して記憶に残ると考えられた。

第2日目(8月21日) 午後 第2室(E-202) (10) 13:00 (11) 13:30

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
(10)	研究	大	教員	伊藤 摂子(東洋大学), 高橋 和子(明星大学), 佐藤 玲子(亜細亜大学)	小学校教員の「外国語活動」指導に対する不安感とは何か—大学生の英語テスト結果から要因を探る—	本発表は、小学校教員が外国語活動に対して持つ不安感と、小学校教員養成課程に在籍する大学生の英語力との関係について論じる。2015年に現職小学校教員に対してアンケートを実施した(対象は東京近郊637校、回収率35.8%。228校、234名回答)。同調査で「外国語活動を担当する際、心配な点や不安に思われていることはありますか。自由にご記入ください」という質問をした。この質問に対する主な回答には、英語による指示や声掛けの難しさ、発音に対する苦手意識、ALTとの打ち合わせや連携の不安、文法知識や語彙力の不足等があげられた。端的に言えば、多くの教員が自身の不十分な英語力に対して不安感を抱いていることがわかる。加えて、本発表では、現職教員に対するアンケート調査結果と、大学生の英語テスト結果を比較する。両結果の比較・検討を通して、小学校教員の持つ不安の源を明らかにし、問題解決のための糸口を示したい。
(11)	事例	高	動機	齋藤 理一郎 (群馬県立太田フレックス高等学校)	ポートフォリオ活用の効果—自律的学習者の育成と教員の同僚性と授業改善—	定時制高校の「コミュニケーション英語」において、ポートフォリオを活用した授業を行なっている。その1年目(昨年度)と2年目(今年度)の実践について報告する。昨年度、初めての取り組みでは、学習者の自律性の育成について、ポートフォリオ学習が効果的であることは検証できた。同時に課題として、教員間の、ポートフォリオ活用の理論的背景についての理解の度合いによって、活用内容に差があることが分かった。2年目の取り組みとなる今年度は、年度当初に教員間でポートフォリオ活用についての共通理解をはかり、授業を開始した。定時制高校の生徒という、リメディアル教育の対象と考えられる生徒たちに対して、教科全体でのポートフォリオ活用の活用が、学習者にとっては自律性の育成にどのような効果があるか、また、教員間での同僚性と授業改善にどのような影響を与えるか、生徒と教員の記述を元に分析、考察した内容を報告する。

第2日目(8月21日) 午後 第3室 (E-205) (10) 13:00

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
(10)	研究	大	リーディング	田中 菜採 (筑波大学大学院生・日本学術振興会特別研究員)	学習者は英文の曖昧な修飾位置をどのように解決しているかー読解時間測定法を用いた意味・統語情報利用の検証ー	本研究では学習者が英文読解中および読解後に意味情報と統語情報を利用できるかを検証した。実験文には田中 (2015)と同様に、前置詞の修飾位置が統語的に曖昧な文を使用した(例The man①repaired the ※watch②with the damage)。with～の前置詞句の修飾位置として統語的に①②の2通りが想定されるが、意味情報を利用するとどちらか一方に決定し曖昧性を排除できる。さらに※の位置に句を挿入し、統語情報の複雑さを操作した。実験では日本人大学生33名を対象に、修飾位置(①・②)×複雑さ(※に句の挿入の有無)の計4条件の英文を単語ごとに提示した。協力者は自分のペースで読み進め、その読解時間を記録した。さらに読解後に選好課題を実施した。結果、読解中に統語情報の複雑さの効果が見られた。また、読解中には意味情報に関連する修飾位置の効果がなかったが、読解後には異なるパターンが得られた。本発表ではその理由を考察する。

第2日目(8月21日) 午後 第4室 (E-206) (10) 13:00

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
(10)	研究	大	リーディング	熊田 岐子 (奈良学園大学)	空間表現の身体性を重視した読みの再検討	日本の英語教育において、文学教材は、言語的・文化的教授の難しさから、その使用がやや避けられる傾向がある。そこで、本研究では、文学教材の一つの使用法として、認知言語学における空間表現(場所・空間を示す前置詞・副詞が字義通りの意味となる)の働きを重視した読解指導を提案・検証してきた。空間表現は、英語母語話者の概念体系の本質となる空間関係が表出したものである。さらに、空間表現に備わる身体性を重視することにより、英語学習者にとって有用な知識を体得できる。本発表では、読解指導の結果として、登場人物の物理的な動作・位置から登場人物の心情・社会的関係を考察する文学的な読みに関する詳細な検討を行う。これまでの研究結果における読みの視点の変化に加えて、事前テストと比較すると、事後テストでは、登場人物の心情についての細やかな記述が表れていた。登場人物の心情において、新たな文学的な読みが拡張したと見受けられる。

第2日目(8月21日) 午後 第5室(302) (10) 13:00 (11) 13:30

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
(10)	研究	高	言語習得	須藤 絢(函館工業高等専門学校), 渡邊 耕二(宮崎国際大学)	高等学校における短期語学研修の効果の検証ー広島県女子高等学校を事例にー	「トビタテ留学! JAPAN日本代表プログラム」に代表されるように、国際的な人材の育成という観点から留学への気運が高まってきている。高校生の留学に着目すると、1か月未満の短期留学・語学研修者数37,070人、1か月以上の留学者数4,979人となっており、圧倒的に短期留学・語学研修が多く、その目的には語学力向上を述べる生徒が一番多い(文部科学省, 2014)。しかしながら、短期語学研修に関する研究の多くは大学生や高専生を対象としたものが多く、高等学校を対象としたものは少ない。また、語学面などでその効果の検証の不十分さも指摘されている(田浦ほか, 2009、木村, 2006、大塚・根岸, 2009)。そこで、本研究では広島県の女子高等学校で毎年行われている約3週間の短期語学研修を対象に、研修参加前後で同一の英語検定準2級とOxford(1990)により開発された言語学習ストラテジー調査紙を用いその効果を2年に渡り検証した。
(11)	研究	大	言語習得	島田 勝正(桃山学院大学)	インプット処理指導とその効果	インプットを重視した指導法の1つにインプット処理指導がある。この指導手順は、(1) 文法の明示的な説明、(2) 不適切な処理方略の修正、(3) 解釈タスクから構成される。本発表では、現在分詞の形容詞的用法(後置修飾)および関係代名詞を扱った解釈トレーニングの効果について、不適切な処理方略(母語の影響および目標言語内の混乱)の減少という観点から報告する。なお、解釈トレーニングは、問題文中の名詞が何を指しているかを特定する参照タスクから、生徒がインプットを自分の生活に関連させて、個人的な反応を示す情意タスクへと移行する。大学生58名を対象にこのトレーニングを課したところ、事後テストにおいて不適切な処理方略の顕著な改善が観察され、一ヵ月後の遅延事後テストでもその効果は一定程度保持された。

第2日目(8月21日) 午後 第6室(304) (10) 13:00 (11) 13:30

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
(10)	研究	大	言語習得	Tomoko Tamura (静岡大学大学院生) , Tomohiko Shirahata (静岡大学)	The Effects of Explicit Instruction on Prefixes for Japanese Adult L2 Learners of English	This study is an attempt to examine the effects of explicit instruction on prefixes (e.g., anti-, sub-) for Japanese adult learners of English (adult JLEs). The issue of whether explicit instruction is effective in promoting learners' second language (L2) proficiency has been a subject of discussion for more than two decades (Truscott, 1996; Bitchener, 2012). The present study argues that explicit instruction can be effective in enhancing L2 acquisition of English prefixes, in general. The degree of its effectiveness, however, varies among prefixes. Explicit instruction on the 17 prefixes was provided to 44 adult JLEs. After the pretest, 25-minute explicit instruction was conducted per month over a period of four month. When the instruction was over, an immediate posttest was carried out. Then, after a four week interval, a delayed posttest was done. The explicit instruction was focused on grammatical categories, meanings and pronunciation of the prefixes. A multiple choice task was used for the tests. The results indicated that the average percentage of correct answers increased from 51.6% (pretest) to 87.6% (immediate posttest). It still maintained a higher percentage of 79.0% (delayed posttest). This suggests that the explicit instruction on the prefixes employed in this study was effective for the adult JLEs. However, the degree of effectiveness varied among the prefixes. For example, the prefix with little effect was inter- (interdependence), which marked the accuracy rates of 56.82% (pretest), 59.09% (immediate posttest) and 59.09% (delayed posttest) respectively. Detailed results and their analyses will be discussed in the presentation.
(11)	研究	大	言語習得	佐藤 正伸(大東文化大学他)	語彙エクササイズの理論と実践	本研究では、第二言語指導におけるエクササイズ論(田中、2008)を考察し、試案的に知覚動詞を扱うエクササイズの提案を行う。良い語彙エクササイズを作成するための満たすための条件は何か。田中(2008)は、良いエクササイズは理論に基づくべきであると主張している。母語を通して意味を確認するという学習方略は一般的に使われているが、日本語の訳語は、英単語の意味を反映しないという問題が起こる。そこで、エクササイズで強調すべきは「認知的再調整」である。また、語は単独であるのではなく、他の語との関係の中にある。そこで、「語彙ネットワークの視点」(Sato & Tanaka, 2014)も考慮点である。本研究では、この2つの視点を取り入れた語彙エクササイズの方法を提案する。

第2日目(8月21日) 午後 第7室(306) (10) 13:00

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
(10)	事例	大	スピーキング	伊東 田恵(豊田工業大学), 石川 有香(名古屋工業大学)	英語の課外活動が英語力に及ぼす影響の調査	ボーダーレスの時代を迎え、英語で円滑にコミュニケーションを行える能力がグローバルに活躍できる人材に求められる要件として広く認知されるようになった。このような時代の要求に応えるため多くの教育機関で英語教育の充実が図られている。英語の学習支援の一環として学生が自由に利用できるセルフアクセスセンターを設置する大学も増えた。本研究では、工業大学の新入学生の協力者26名に対して英語による事前・事後インタビューを実施し、セルフアクセスセンターで行われる課外の英会話や英語で行われるプロジェクト活動への参加が発話の流暢さやTOEICの得点などにどのような影響を与えるかを調査した。課外活動の時間と発話の流暢さに相関はほとんどみられなかったが、活動時間が平均よりも多かった学生がよりTOEICの得点を上昇させている傾向が見られた。

第2日目(8月21日) 午後 第8室(E-308) (10) 13:00 (11) 13:30

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
(10)	研究	大	テストイング	立田 夏子(弘前大学)	大学教養教育英語科目におけるポートフォリオの活用ー欧州言語ポートフォリオの応用可能性ー	本研究では、大学教養教育英語科目にて活用したポートフォリオの有効性について検証した。欧州評議会が作成した『欧州言語ポートフォリオ』を基に、ポートフォリオを作成し、活用後に英語学習のリフレクション活動とアンケート調査を実施した。それらの内容は、主に、1) 英語力の自己評価の変化、2) ポートフォリオの各項目についての記述の難易度、3) 教養教育英語科目にてポートフォリオを活用することへの好意的反応の有無、4) 英語学習へのモチベーションの変化の四項目であった。結果は、ポートフォリオの各項目についての記述の難易度は、項目ごとにばらつきがあり、MEPの改善点が示唆された。また、ポートフォリオを活用することへの好意的反応と、英語学習へのモチベーションの向上がみられたが、英語力の自己評価には変化がみられなかった。発表では、上記の観点から、大学教養教育英語科目における欧州言語ポートフォリオの応用可能性について議論する。
(11)	事例	大	ライティング	長橋 雅俊(聖徳大学)	英検2級の新試験に伴うライティング指導事例	日本英語検定協会は、今年度より新たに2級でライティング問題を出題する。いわば「グローバル人材の育成」が国策で強調される近年、直接技能の評価に踏み切ったわけだが、資格取得に意欲ある学校や英語科教員には少なからず混乱を生じた現場もあったと見込まれる。本発表者の勤務校も例外なく、英検2級～準1級の受験に臨む学生を抱えており、授業と資格対策が直結した語学プログラムへの対応は急務である。今回の事例報告では大学3年生11名を対象とし、多くが英検2級の受験準備期の習熟度を有する。指導にあたり、まず予想トピックを提示した上で、タスク到達までの要件を学生と吟味した。そして、予め蓄えるべき段落構成の知識、定型句を確認し、アウトラインによる作文計画に取り組んだ。当日発表では授業評価の一環で実施した即興作文テストの結果を示し、習得の求められる重要領域(語彙・作文方略)や、今後の指導への展望を議論する。

第2日目(8月21日) 午後 第9室(E-311) (10) 13:00

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
(10)	研究	大	ライティング	山下 美朋(立命館大学)	英日対照エッセイの論理分析— 英文の論理破綻は和文にも見られるのか?—	英文ライティング指導で論理的な文章を書かせる必要性が高まっているにもかかわらず、英語教育の現場では論理や修辭的側面の指導が少ないと報告されている(保田・大井・板津, 2014)。本研究では、Kaplan(1966)以降の対照修辭学研究の流れを汲み、日本人英語学習者の英文の論理構造及び論理展開に母語の影響があるのではないかと仮説から、日本人大学生30名が書いた英日対照の作文の比較を行った。具体的には、発表者が考案した「4つの分析的枠組み」(山下, 2015)の一部を用い、「構造タグ」及び「論理タグ」を付与し量的質的分析を行った。その結果、学生の英文に特徴的な論理破綻が明らかとなり、なかでも英文の論理構造を和文に転嫁しても問題はないが、和文の論理構造を英文に転嫁した場合の破綻が見られた。本発表では、英文と和文を比較しながらテキストの論理構造や修辭的特徴を指導する授業についても述べ、日英両言語のライティング指導の必要性を提言したい。

第2日目(8月21日) 午後 第11室(315) (10) 13:00

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
(10)	研究	中	音声	河内山 真理(関西国際大学), 有本 純(関西国際大学)	中学校用教科書ガイドにおける 発音表記の扱い	英語の検定教科書では、中学1年生に対して新出単語に発音記号は示されていない。中学生が学習の参考によく用いる教科書ガイドでの発音表記について、中1用の6社について調査を行った。その結果、本文にすべてカナ表記で読み方が付いているものが2社、他は新出単語等一部に付いていた。カナ表記は6社で微妙に異なっているが、日本語と異なる音をどう表記するか工夫による差であった。大別すると①カタカナだけ、②日本語にない音に平仮名を当てた表記、さらに③閉鎖音を小さい文字や上付き文字で表すというパターンがあった。表記の工夫も、調音の説明がないと、どのように調音するのか分からない。一方で、中学生用の辞書は基本的に発音記号とカナ表記を併記しているが、このカナ表記も教科書同様、出版社によって異なっている。教科書ガイドと異なる出版社の辞書を参考にした場合に、表記がかえって学習者を混乱させる恐れがあることがわかった。

第2日目(8月21日) 午後 第12室(314) (10) 13:00 (11) 13:30

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
(10)	事例	大	指導法	森本 俊(常磐大学)	認知意味論的アプローチに基づいた冠詞と名詞形の指導実践	多くの日本人英語学習者にとって、状況に応じて適切な冠詞と名詞形を用いる力を身につけることは、往々にして困難である。その要因の一つとして、学校教育において体系的かつ納得感を伴う指導が必ずしもなされてこなかったという点が挙げられる。本発表では、冠詞と名詞形の指導における認知意味論的知見の応用可能性について、大学1年生を対象とした実践事例を通して議論する。具体的には、冠詞を含む名詞形が、①話し手が対象をどのように捉えるのか(対象認知)、②その対象を聞き手が共有することができるのか(情報共有)という2つの認知的プロセスを経て決定されることを意識化させる試みを行った。以上の視点を踏まえ、本発表では効果的なエクササイズの在り方を具体例と共に提示する。また、指導を通して学生の理解がどのように変化したかについて紹介したい。尚、本事例は、大学のみならず、中学校や高校での指導にも幅広く応用可能である。
(11)	研究	中	指導法	西垣 知佳子(千葉大学), 中條 清美(日本大学), 神谷 昇(千葉大学), 小山 義徳(千葉大学), 安部 朋世(千葉大学), 横田 梓(千葉大学教育学部附属中学校)	データ駆動型の語彙・文法学習支援システムの構築—小・中・高におけるコミュニケーション活動とデータ駆動型学習(DDL)の融合—	発表者らは、これまで小・中・高において、「データ駆動型学習(DDL)」を用いて授業実践を行い、DDLが学習者の明示的知識を育み、記憶の保持に有効で、言語規則の発見の目を育てること等を確認してきた。このような成果を踏まえ、本発表では、教室指導と家庭学習で活用できるDDL学習支援システム開発に関わるこれまでの成果と現在進行中のプロジェクトの構想を述べる。支援システムは1) 対訳付き入門期英文コーパス, 2) 入門期英文コーパスをWEB検索できる英文検索ソフト, 3) 学校文法を基盤とする「語彙・文法学習表」から文法項目を選んで例文を提示するプロファイリング例文表示型の検索ツール, 4) DDL教材集, から成る。発表者らは大学初級学習者用教材を先行して開発・実用化した。本研究ではコミュニケーション重視型の小・中・高の英語授業に、明示的な語彙・文法指導を融合させる支援システムの構築を目指す。

第2日目(8月21日) 午後 第13室(303) (10) 13:00 (11) 13:30

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
(10)	研究	大	語彙	Kiwamu Kasahara (北海道教育大学), Ai Hirai (神戸学院大学)	Effective presentations of known-and-unknown two-word combinations: Massed or distributed	The purpose of this study is to investigate how to present known-and-unknown word combinations for learners of English. Kasahara (2010; 2011) showed that learning a known-and-unknown word combination was superior in terms of retention and retrieval of meaning to learning a single unknown word. However, effective presentations of these word combinations are still not clear. The present study examined which method, massed or distributed presentation, is more effective to master the target words in known-and-unknown two-word combinations. The authors selected 18 new target words. Three known collocates to each target word were chosen. Then, the authors made two types of word list: a massed presentation list (MPL) and a distributed presentation list (DPL). Each list consists of three different lists. MPL presented six target words with the total of 18 combinations on one list. Three combinations including the same target were shown consecutively on one list. On the other hand, DPL presented different combinations of the target words on three separate lists, each containing 18 target words and 18 combinations. Three different combinations including the same target word were shown on three different lists. In the massed learning group, the participants learned the meaning of each target word in the three consecutive two-word combinations. In the distributed learning group, the participants learned the meaning of each target word with some interval between the same three combinations. The results showed no significant difference between the groups. A possible reason is that the learning burden was too heavy for the participants.
(11)	研究	大	語彙	多田 豪 (筑波大学大学院生)	英単語学習における既知の類義語の活用法—語彙知識の深さの向上に焦点を当てて—	本研究では、意図的語彙学習で身につく語彙知識の深さに関し、未知語1つに対して提示する既知語の数、および未知語と既知語の意味的関連の強さが持つ影響を検証した。先行研究では、未知語学習時に既知の関連語を共に提示することで、学習した語の想起が促されていた。しかし、既知の関連語の提示が語彙知識の深さ(類義語との意味の区別など)の向上にも効果があるのか、その効果が提示する関連語の数や未知語との意味的関連の強さによってどのように異なるのかについては検証が少ない。本実験では日本大学生が目標語のリスト学習を行い、共に提示する既知の語の数(1つ/2つ)と意味的関連の強さ(意味が近い/遠い)で効果を比較した。学習直後と1週間後にテストを行ったところ、既知語の数と関連度が語彙知識の広さ、深さの学習に与える効果について、示唆が得られた。本発表では実験結果を基に、語彙指導時の関連語の活用法についても議論する。

第2日目(8月21日) 午後 第14室(305) (10) 13:00 (11) 13:30

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
(10)	研究	高	語彙	高橋 有加 (東京外国語大学大学院生)	中高生の英作文における関係代名詞-CEFRレベル別の使用傾向とエラー分析-	本研究では、ヨーロッパ言語共通参照枠(CEFR)のA1~B2レベルを同定する際の言語特性である「基準特性」として関係詞を取り上げ、日本人中高生の英作文(JEFLLCコーパス)を対象に関係詞のタイプ別の使用傾向を探るとともに、エラーの質的分析を通してエラーが起こる要因を考察することを目的とする。量的分析では、JEFLLCコーパスにおいて、関係詞の使用頻度自体が基準特性になりうることを示唆された。エラーに関しては、a)語順・構造エラー、b)選択エラー、c)代名詞残留などが見られ、レベルや関係詞のタイプごとに頻度に違いが見られることがわかった。今回の研究では、「語順・構造エラー」の細分化・質的分析を試み、その要因を考察した。その結果、関係節内でのbe動詞を落としている例が多く見られ、a)関係詞の後の受動態のエラー、b)分詞の後置修飾との混同などが要因として挙げられることが示された。
(11)	研究	大	語彙	鈴木 健太郎(共栄大学)	英語学習者は文脈内の未知の複合語をどのように理解するかー形態素と文脈情報の統合処理を中心にー	複合語のように複数の形態素からなる語には、構成する個々の形態素の意味が語全体の意味と関連しているもの(例. milkshake)と、無関連なもの(例. cocktail)がある。そのため、読み手が未知の複合語に遭遇した場合、形態素情報に加えて文脈情報を利用して理解することが重要である。しかしながら、読解中にこのような処理が自動的に生じるかは十分に明らかではない。そこで本研究は、文脈内の未知の複合語の理解を、形態素と文脈情報の統合処理の観点から検証した。実験では目標語の疑似複合語(例. drinkblend)を、個々の形態素から考えられる意味と一貫した文脈と、一貫しない文脈で提示した。協力者は内容理解のために文脈を1語ずつ読解し、目標語における読解時間を条件間で比較した。分析の結果、統合処理の必要条件に関する示唆が得られた。本発表では、結果をもとに未知の複合語の理解プロセスと、統合処理の役割について議論する。

第2日目(8月21日) 午後 第15室(309) (10) 13:00 (11) 13:30

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
(10)	研究	小	早期英語教育	根本 康平(青山学院大学大学院生), 高木 亜希子(青山学院大学)	小学校外国語活動における初任外部講師の変容—授業後の対話的リフレクションに基づいて—	本研究の目的は、公立小学校外国語活動の授業を担当した初任の外部講師が、毎回の授業の振り返りの結果、どのように授業に対する取り組みが変容したかを明らかにすることである。第1発表者は、1年間にわたり、公立小学校において、担任とチームティーチングで週1時間の授業を担当した。近年、教師教育において省察の重要性が認識されているが、初任教師が、深い省察を行うことは容易ではない。本研究では、ふり返りとふり返りに基づく授業改善を促進するため、メンターである第2発表者と毎回の授業後(25回)に対話的なリフレクションを行った。第1次分析では、ふり返りの内容を明らかにするために、テーマ分析が行われ、243のコードが付与された後、7つの主要なカテゴリーが浮かび上がってきた。第2次分析では、1年間の変容を探るために、エンゲンストロームの活動理論に依拠した分析を行った。本発表では第2次分析結果に焦点を当てて論じる。
(11)	研究	小	早期英語教育	長田 恵理(國學院大學), 柏木 賀津子(大阪教育大学), 山口 高領(早稲田大学)	イタリア・トレント市の小学校CLILの取り組みと教師の抱える問題	本発表では、CLILに取り組んで10年になるイタリア・トレント市のS小学校での授業の様子を報告し、授業観察とインタビューからみられた教師の抱える問題について検討する。この小学校では、イタリア人担任教師または(ニア)ネイティブの英語講師によって、ほぼ英語のみで指導される「音楽」「算数」「英語文化」など週8～9時間のCLILに加えて、「英語」の時間にはフォニックスも指導されている。CLIL授業では教師が児童に対して言語への気づきを促すなどteacher talkに工夫が見られ、子どもたちも積極的に授業に参加していたが、教員免許を持たない英語講師の授業では初等教育の観点から見た課題が浮かび上がった。一方、CLIL授業指導のために必要とされるCEFR B2レベルの英語力があるにもかかわらず自分は指導ができるレベルに達していないと考える担任教師もおり、「初等教育の専門性」と「英語力」をどう補完するのか、日本への応用を視野に入れて論じる。

第2日目(8月21日) 午後 第16室(310) (10) 13:00

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
(10)	事例	小	早期英語教育	東 仁美(聖学院大学)	小学校英語教科化に向けての指導者養成—専科教員の可能性を探る—	次期学習指導要領では小学校英語が教科化される方向であり、教科としての小学校英語の指導者養成が喫緊の課題となっている。本学欧米文化学科では中高英語科教員免許の他、小学校英語指導者認定協議会(J-SHINE)の指導者資格取得が可能であり、英語科教職課程の学生のうち、半数以上がJ-SHINE資格を取得している。また、J-SHINE資格取得を目指さない学生も、学科の専門科目として開講されている「児童英語教育科目」を最低1科目は履修しているのが現状である。本発表では、中学校での教育実習において小学校英語教育の知識や小学校英語活動の観察実習、授業実習がどのように役立ったかを検証する。また、小学校英語教育関連科目を履修した中学校英語科教員免許取得者が、教科化される小学校英語で専科教員として指導する可能性を探っていきたい。

第2日目(8月21日) 午後 第17室(501) (10) 13:00 (11) 13:30

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
(10)	研究	中	教員	三上 明洋(近畿大学)	アクション・リサーチの実践が英語教師の専門能力に及ぼす影響	近年、生涯に渡る教師の成長が重要視される中、アクション・リサーチ(以下AR)の実践を取り入れた現職英語教員研修がますます注目されるようになってきている。しかし、実際に、英語教師は、AR実践を通してどのような専門能力をどの程度向上させることができるのかについてはまだほとんど明らかにされていない。そこで、本研究では約8か月に渡るARの実践前後において、参加教員の専門能力に関する認識がどのように変化するかを調査する。参加者は中学校英語教師35名であり、英語教師の専門能力の枠組みに基づいて作成された自己評価チェックリスト(三上、2015)を使用し、自己評価の変化を分析した。その結果、ARの実践前後において、「教科の知識・技能」と「教科を教えるための知識・技能」では変化が確認されたが、「教科指導技術」と「教員の成長に関する知識・技能」では変化が確認されなかった。
(11)	研究	大	教員	東條 弘子(順天堂大学)	大学英語教師による授業省察過程の検討ー半期授業実践録の内容分析ー	本研究の目的は、大学英語教師が半期毎授業後に記した授業実践録の内容を分析し、教師の授業省察過程のあり方を検討することである。本研究は授業者としての筆者が、自身の教育実践の改善を企図し着手する、アクション・リサーチである。2015年4月～7月まで行われた授業の直後に、筆者はA4用紙1枚以上の実践録を記すことを自らに課した。入手したデータの内容を質的に分析した結果、以下4点が明らかになった:1)記述内容からは11の特徴が見いだされた;2)時間経過に伴い、学生個人の認知発達に教師が専心するようになり、思考の深化と複雑化が見られた;3)教師認知の3分の2が、教室談話の有り様に占有されていた;4)教師の感情が半期内に限り狭められる傾向にあった。教師による学生理解が進むにつれ、学生認知のあり方に注目する傾向にあることと、学生の要望にも徐々に応えやすくなることから、半期ごとのクラス編成には慎重になるべき旨が示唆された。

第2日目(8月21日) 午後 第18室(502) (10) 13:00 (11) 13:30

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
(10)	事例	高	指導法	今井 理恵(新潟医療福祉大学), 峯島 道夫(新潟医療福祉大学)	「コミュニケーション英語 I」指導を通して批判的思考力を育成する一教科書に準拠した「CTスキルズ」と「核となるパフォーマンス課題」の開発ー	本発表は、コミュニケーション英語Iの授業で高校1年生に批判的思考(クリティカルシンキング)の力を育成する目的で、教科書準拠の課題と評価規準を作成し指導した実践報告である。本実践では教科書の各単元を通じて用いる(単元共通の)評価規準を批判的思考技能(CTスキルズ)として定めた。加えて、CTスキルズの達成をはかるべくして、単元ごとに異なる(単元別の)「核となるパフォーマンス課題」と評価規準を作成した。学習者は単元開始時に、目標とするCTスキル、学習後に取り組むことになるパフォーマンス課題、及びその評価規準を「パフォーマンス評価シート」で確認し、予め単元全体の見通しを立てる。学習者の課題への回答をCTスキルズに照らし評価した結果、課題を重ねる毎に、学習者が適切にCTスキルを活用するようになったことが読み取れ、評価規準としてのCTスキルズおよび核となるパフォーマンス課題が妥当かつ有効であることが分かった。
(11)	事例	高	指導法	山口 和彦(山形県立上山明新館高等学校), 金谷 憲(元東京学芸大学)	Speak Out方式(山形西高版)の応用	「アウトプット活動を通じ、(間隔を空けて)教科書を繰り返し使うことによって、学習内容の定着率を上げる方法」であるSpeak Out方式。進学校である山形西高校では、金谷憲がアドバイザーとなり、年度内に発表活動を通じて繰り返し教科書を使うことで成果を収めることができた(前回大会で発表済み)。その第1期生を担当した本発表者は、昨年度、転勤した上山明新館高校で継続してSpeak Out方式を1年生に実施した。英語の苦手な生徒がほとんどという環境ではあるが、発表活動を山形西高の年間2回から3回に増やして実施した。その成果を、発表活動の動画、および執筆段階で未受験のGTEC for Studentsなどの結果と合わせて報告する。

第2日目(8月21日) 午後 第19室(503) (10) 13:00 (11) 13:30

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
(10)	事例	大	リーディング	牧野 真貴(近畿大学)	英語が苦手な大学生のための楽しいリーディング授業	本発表は、英語が苦手な大学生のための楽しいリーディング授業実践報告である。本研究には英語リメディアルクラスに在籍する大学1年生19名が参加した。英語授業は週に2度、前期・後期を発表者が担当し、リーディングは週に1度行われた。中学校や高校で行われる訳読式授業では、学生の英語苦手意識をあおると考え、全文を訳すのではなく、アクティビティを取り入れながら段落ごとに内容理解を深めることを試みた。例えば、各段落毎に学生にとって難易度が高いと思われる単語や構文をリストアップしておき、本文を読む前にゲームで楽しく単語と意味を結び付ける、構文の理解を図る、などして英文を読みやすくした。この他にも様々な取り組みを行った結果、授業開始当初は英語を読むことに不安な表情を見せていた学生が、「え、もう授業終わりですか?」と発言するほど授業に集中するようになった。また、学生の英語力に有意な伸びも確認された。
(11)	事例	大	リーディング	川崎 真理子(関西学院大学)	日本人成人英語学習者のディコーディング学習	書字から音声への変換(ディコーディング)力向上のための音韻認識と変換規則の指導、及びその効果検証の結果を報告する。ディコーディングの難易度は書字体系によって決まる。仮名文字は音節に、アルファベット文字は音素に対応する。対応単位が小さいほうが難しい。また、英語は対応規則が複雑である。加えて、英語学習初期に、「文字の読み方」が重視されていないことも、読むことを苦手とする学習者を作る原因であろう。ここでは授業時間に既知/未知の単語を使用し、ライミング判定の練習から始め、音素-書記素対応規則の1つSilent Eを導入し、さらにディコーディングを練習した。非単語音読試験より、音読潜時、音読時間、正読率を、聞いた単語を綴る遅延試験より正答率を算出した。正読率は有意に向上したが、音読潜時や音読時間及び変動係数には変化がなかった。i-eは音読時間が伸長し、誤読み・誤綴りの主原因はローマ字変換規則の適用であった。

第2日目(8月21日) 午後 第20室(505) (10) 13:00

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
(10)	研究	高	語彙	内田 富男(明星大学)	「happyの反対はunhappy」と教えてはいけない8つの理由－発信語彙-コロケーション指導への示唆－	語彙の拡張を目的とする学習方略のひとつに反意語を同時に学ぶ方法(例happy⇔unhappy)がある。しかし、この方略は発信語彙として指導する際には注意が必要である。なぜならば、反意語とは文字通り反対の意味を表す語ということであり、語の意義素や用法等の詳細な違いは保証されない。happy/unhappyの場合、いずれも意義素は反対称にはなっていない(WordNet3.1)。また、用法によっても語義は異なる場合がある。コロケーションともなると反意語のふるまいは非対称とも言えるほど異なる。学習者は既習語やその反意語を含むコロケーションにおける中心語と共起語の差異までは想像もせず、「happyの反対はunhappy」と単純化し、拡大解釈するだろう。本発表では、CEFR-J Aレベルの形容詞に着目し、コーパス分析に基づき、発信語彙の指導への示唆について述べる。

第2日目(8月21日) 午後 第21室(507) (10) 13:00 (11) 13:30

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
(10)	研究	大	学習者	豊嶋 朗子(国際教養大学)	英語科教育における評価の英語学習者や英語学習への影響	本研究では、日本の英語科教育を経験した日本人英語学習者がその経験がのちの英語学習や英語学習に対する態度にどのような影響を及ぼすかについての調査したものである。本研究で特に注目したのは、筆記試験や技能テストで測る認知スキル評価と筆記試験や技能テストで測れない自己制御、自尊心、動機、勤勉性を測る非認知スキル評価を受けたかどうか、またその影響である。本研究は質的調査方法を採用し、ある程度の質問事項を決めた上で自由に会話する形式のインタビューを大学生17名に行った。主な発見としては、中学入学以前に英語学習を始めた協力者は英語を「言語」ととらえ、英語でコミュニケーションをする機会を探し、認知スキル評価以外の評価を求める傾向にあるようだが、中学から英語学習を始めた協力者は英語を「教科の1つ」ととらえ、認知スキルを上げることが学習動機であり、その経験が大学での英語学習に影響を及ぼしているようである。
(11)	研究	大	学習者	保坂 華子(東海大学)	なぜ英語を学ぶのか－大学1年生の意識の考察－	「なぜ英語を学ぶのか」- 英語教育に関わる者にとって身近だが深遠な問いである。これを題材に、中高での英語教育を経て4年制大学に入った文学部全14学科1年生対象の必修科目内で、90分間の講義を通じて履修者約1,000人とともに考えた。講義前と講義後のミニッツ・ペーパー(単位習得にかかわる)内の自由筆記回答をもとに分析して考察する。所属学科の内容が英語に直接関係するかどうかにかかわらず、普段「英語を学ぶ問題意識」はあまり高くなく、あらためて考える機会を通じて、興味度の高かった学生は「再認識」、「再確認」、興味度が高くなかった学生には「興味」をもつ機会となった傾向が見られた。本発表では、大学1年生(文系)の「英語を学ぶ」意識の傾向を考察し、「なぜ英語を学ぶのか」を再確認する過程を通じての意識の変化を論じる。*備考* 本発表対象は、大学中心ですが、そのほかの一般参加者も想定しています。

第2日目(8月21日) 午後 第22室(515) (10) 13:00 (11) 13:30

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
(10)	研究	大	指導法	KOGA Tsutomu (東海大学), SATO Rintaro (奈良教育大学)	Teaching English in English or in Japanese: Effects of Instructional Languages on Development of Communication Variables	Officially senior high school English lessons are required to be conducted in English. This principle can be regarded as valid from the view point of second language acquisition theories in that students are provided a great deal of input and interaction opportunities in the target language. However, we can still argue for or against to what extent it should be used for learning to take place, especially in foreign language learning contexts where the frequent exposure to the target language is strictly restricted in the classroom. Some studies have examined the effects of lessons conducted in the target language. However, these studies failed to compare their experimental group with a counterpart, making their claims of effectiveness of their pedagogical interventions more ambiguous and difficult to confirm. In this presentation, therefore, we will discuss the investigation into the effects of different instructional languages on changes of communication variables by comparing two groups: teaching English in Japanese (TEJ) and teaching English in English (TEE). The results suggested that the level of willingness to communicate significantly increased in TEJ. This unexpected result is contrasted by the result of Sato and Koga (2012) where learners' willingness to communicate positively increased in TEE. However, the examination of students' free responses showed rather contradictory results; students in TEE were more likely and willing to use English than those in TEJ. After a discussion of the interpretation, this presentation will end with some practical and pedagogical suggestions regarding teaching English in English.
(11)	事例	中	指導法	安部 肇子 (神奈川県横浜市立山内中学校)	Small Stepで取り組む一語彙から4技能、表現まで	小学校に英語が導入され、中学校では新しい指導が求められている。中学入学時点で、海外生活経験や英族に母語話者がなくとも英検準2級を取得している生徒と、英語の時間に聞いたことのほとんどを忘れていく生徒が混在するなかで、従来のような「積み上げ式」では対応できず、学習の進んだ生徒、学習が遅れがちな生徒の双方を視野に入れ授業を展開する必要が出てきた。手を換えながら繰り返しをすることで、その両方のニーズに合わせ、また記憶の助けとし、また4技能を育てる実践を帯活動で行って、ある一定の効果が認められてきた。今回は、さらに発展させ、3年間を通して「プレゼンによる学校案内を作ろう」というプロジェクトとして目標を明確化し、small stepのタスクを繰り返し与え、少しずつ目標を超えることで、自信を与え、outputにつなげられるように再編成を試みた。結果、「多少の困難は甘受でき、表現を楽しむ生徒」の姿が見られるようになった。

第2日目(8月21日) 午後 第23室(516) (10) 13:00 (11) 13:30

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
(10)	研究	小	動機	角田 瑞希(新潟県加茂市立下条小学校), 染谷 藤重(昭和学院中学校・高等学校)	小中連携を目指した小学生と中学生における英語学習動機づけの構造的変化—有機的統合理論を用いた横断的研究—	現在、外国語活動は、年間35単位時間が確保されている。しかし、初歩的な英語運用能力を身に付けることや、小中連携、児童生徒の動機づけなど様々な課題があると言える。本研究では、児童の動機づけに焦点を当て、小学5年から中学3年までの児童生徒を対象に動機づけに関するアンケートを行った。その結果、自律的な動機づけは学年が上がるにつれて減少し、他律的な動機づけは上昇していた。中学3年の段階では自律的な動機づけが減少し、他律的な動機づけは減少していた。原因として、環境が変わったり、進路を意識したりすることで、英語学習に対する動機づけに大きな変化が起こるだと考えられる。さらに、英語学習に対する動機づけと積極性との関係性では、小学校段階と中学校段階で結果が異なったことから、児童生徒の英語に対する考え方や必要性が変化していると言える。今後は調査の参加者を増やし、一般化していくことが課題である。
(11)	研究	大	動機	土屋 麻衣子(福岡工業大学)	形成的フィードバックの被経験度に関する調査—動機づけの観点から—	Dornyei(2005, 2009)のL2 Motivational Self Systemの3つの構成要素の1つ、learning experienceがシステムの中核であるideal L2 selfにどのような影響を及ぼすのかは、日頃、教室で学習者と向き合う教師には非常に興味深い点である。ideal L2 selfは、学習者の理想と現実のギャップを無くしたいという願望により生まれるモチベーションである。学習者は理想の状態に近づくために自分で調整しながら学習を進めるわけだが、効率的な自己調整に形成的フィードバックは重要な役割を果たすと考えられている。日本の英語教育に関して形成的フィードバックに関する先行研究はほとんど見られないため、本研究では、まず学習者が形成的なフィードバックをどの程度経験したと認識しているかを調査することにした。発表ではそのアンケート結果をお伝えする。

第2日目(8月21日) 午後 第24室(517) (10) 13:00

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
(10)	事例	その他	特別支援	加藤 智行 (東京都立八王子盲学校)	生徒の表現力を伸ばす授業づくり—見えにくさに配慮した指導実践から—	盲学校に在籍する生徒は、見え方に応じて点字や拡大文字を活用して教科書の内容を学習している。自ら考え、考えたことを伝え合い、考えをまとめるといった一連の活動を授業に位置付け、思考力・判断力・表現力を培い、基礎力の定着を図っている。また、教科書に載っている寸劇などを題材とした英語劇や修学旅行の見学先の報告書(レポート)作り等にも取り組み、知識として習得した語彙や文法を生かして英語を運用する力を伸ばすこともねらいに学習を進めている。本発表では、日々の授業の型や言語活動の取組状況を紹介し、生徒が考え、表現する力を高めることにつながる方途を示す。こうした取組が、特別支援教育の実践として普及し、通常の中学校や高等学校等の教員と指導観を共有することができればと切に願う。

第2日目(8月21日) 午後 第25室(519) (10) 13:00 (11) 13:30

	区分	対象	領域	発表者	発表題目	発表要旨
(10)	研究	高	その他	山本 昭夫(学習院高等科)	高大接続システム改革における英語教育担当者の課題	本発表の目的は、現在進行中の高大接続システム改革における英語教育担当者の役割を考察することである。高大接続システム改革は、2012年8月の文部科学大臣からの中央教育審議会への諮問から始まり、2016年3月の高大接続システム改革会議「最終報告」公表、2019年度「高等学校基礎学力テスト(仮称)」と2020年度「大学入学希望者学力評価テスト」の実施につながっていく。「大学入学希望者学力評価テスト」では、知識・技能のみならず、思考力・判断力・表現力を問い、思考力を測る問題として「合教科・科目型、総合型」問題と記述を導入する。一方、外国語の一科目である英語では、4技能の測定を重視するため、民間の資格・検定試験等の活用を促進する。高等学校や大学におけるアクティブ・ラーニングの推進、IB校導入校の増加の連動もある。以上の状況の中で高大の英語教育担当者の主体的な姿勢や行動案を提示したい。
(11)	研究	高	教員	酒井 志延(千葉商科大学), 清田 洋一(明星大学)	教員のための省察ツールについての一考察	近年、「Can-do list」も含め、省察が人気である。Dewey(1919)は、省察を切実な要求から湧き上がってくる、経験に意味を与える過程だと述べている。しかし、「自発的意思に基づかず、短い時間や乏しい材料で、上位の立場の者がその内容をチェックする環境だと、リフレクションはただの面倒な儀式になってしまう」という意見もある。筆者達の研究グループはJ-POSTLを開発した。そのツールは、成長したいと望む教師が使うもので、強制するものではない。それゆえ、教師が自身の授業改善の取り組みと組み合わせることで、自身の成長を実感できる。また、J-POSTLの記述文リストの項目は、英語教師として必要な能力の記述がほぼ網羅してあるので、継続的に教職課程の学生からベテランの教師まで使用することができる。本発表では、J-POSTLを使用して成長のための省察について、その理念と実施方法について述べる。

第2日目(8月21日) 午後 E-102 14:00~15:40

シンポジウム	日本の英語教育の将来 ー効果的な授業の組み立て方について考えるー	コーディネーター兼司会: 亘理陽一(静岡大学) シンポジスト: 佐藤臨太郎(奈良教育大学), 松村昌紀(名城大学)
--------	-------------------------------------	--